「ツダドン」こと「有馬藤太」

増山雄三

薩摩藩の「有馬藤太」というのは、幕末から戊辰戦争にかけての名物男で、「ツダドンの抜き打ち」といえば、中村半次郎（後の桐野利秋）のそれと並べられたものらしいが、「ツダドン」というのは、「藤太どん」の薩摩なまりであるという。

このツダドンが、幕末の京で駆けまわっていた頃、ある日、四条縄手を一人で歩いていると、向こうから、薩摩とは犬猿の仲だった会津藩の侍が二人やってきて、ツダドンの薩摩風の月代を見て、最初はやるつもりで、ぱっと両側に分れて、どんどんやってくる。

「私は武事はどうも苦手で」と、ツダドンは絶えず言っていたし、薩摩の仲間達にも、ツダドンは議論に強いが、喧嘩とみれば逃げると言われていたので、この時も逃げてやろ

うと左右を見たが、生憎その辺りは横丁がなかったので、じりじりと後退しつつ敵を見ると、自分より腕は下の様だが、ただ相手は二人なので、少し下がって得意芸をやった。

それは、薩摩の兵児がよくやる「下駄礫」という、履いている下駄を相手に飛ばすもので、それが一人の顔に当たろうとしたので、相手がそれを避けた時、ツダドンの抜き打ちが殺到し、左肩からみぞおちまでを斬り下げられ、地響きをたて殺されて転がったので、他の会津侍は慌てて逃げてしまった。

この有馬藤太の「藤太」は、有馬家代々の世襲名で、父は藩の砲術師範だったが、藤太ははじめこの藩の者なら誰でもやる示現流をまなび、そのあと彼自身の好みで、「飛太刀流」という、古い流儀を小野強右衛門に学んで、十九才でその師範代になった。

それで、藩での藤太の職務は、始め御細工所の下目付という、いわば守衛のような役目だったが、二十二、三の頃、藩の役目で大島

に出張した時、この島に流罪されていた、藩の内外では高名な「西郷吉之助（隆盛）」という政治犯を始めてみた時、雄偉な人物にすっかり傾倒してしまった。

それで、西郷という人物は、桐野や彼の様な木強漢（ボッケモン）が大好きだったようで、ひどく可愛がってもらい、維新前後に三十一才だったツダドンの活躍は、西郷の贔屓によるものだった、といわれている。

慶応三年十一月、三十一才のツダドンは当時国詰めだったが、この日は非番なので、屋敷で子供をあやしていると、外洋船の発着する前ノ浜の方向から、藩の慣習として船が到着した時に鳴らす、合図の銃声が聞こえた。

ツダドンは、それが鳥羽伏見の戦い準備のため、京都からやってきた、同藩の黒田清綱がやってきたのだと知り、使いがやって来たので、彼は急いで海岸の蒸気船問屋に駆け付けると、「ツダドン遂に物に成ったど」というのが、黒田の第一声だった。

物に成ったというのは、薩摩藩の過激派がかねがね待ち望んでいた、倒幕に機会が到来したという事で、黒田は、すぐ郷士部隊を一大隊ほど組織してくれというので、城下の士は藩の命令がないと動かせないので、外城の郷士だった黒田やツダドンの同志を、隊長にして出陣させる事にした。

これが、薩軍が大挙上洛する真相だが、昔の関ケ原合戦の時の様に、城下から伝令が走って、農民の郷士どもが三々五々山陽道駆けのぼって大坂に着いたというが、戊辰戦争の直前もそうなったのだ。

そこでツダドンは、直ちに黒田の屋敷を軍隊編成の臨時事務所にして、他の同志と相談し、都城・阿久根・出水・高岡から小隊を集め、更に他の地区から二小隊を集め、大隊とする事を決め、大将は島津主殿とした。

さらに士官については、ツダドンらの同志がなり、合わせて十六人になったが、そのうちの三人が、後の戦いで戦死したものの、ツ

ダドンは東山道総督府副参謀になり転戦し、流山で**近藤勇**を捕縛した事で名を挙げた。

その経緯というのは、近藤勇が出没している噂を聞いた官軍の士官が、「近藤はいま流山に着いたばかりなので、その隙をつき今夜夜襲する」とツダドンに命令したので、かねてより、近藤を中岡慎太郎や坂本竜馬を非業の死に追いやった犯人と思っていた彼は、二人の仇を取りたいと思っていたのだ。

そして、当日の夜が明けようとする午前四時、ツダドンは「**流山へ**」と軍令を発し、急ぎ隊伍を整え流山へ向かい、近藤の仮本営を包囲すると、不意を衝かれた近藤は射撃を始めたので、双方撃ちあいになったが、やがて近藤の方が射撃をやめたので、ツダドンの方も射撃をやめさせた。

すると、近藤がやってきて「**大久保大和**」という名刺を差しだしたので、馬上にいたツダドンは下馬し、総督府副参謀の有馬藤太と返礼したが、彼は近藤の顔を知っていたが、

知らぬ顔でいる方が、敵将に対する礼儀だと思ったので、その事は黙っていた。

　そのあと近藤は、「先ほど菊の御紋を拝見し官軍だと分りました。存ぜぬとはいえ官軍に対し発砲したのは誠に申し訳ない。慶喜公も謹慎帰順をいっておられるので、誠に不敬でありました。どうか攻撃の中止をお願いします」というので、ツダドンは攻撃をやめさせ、近藤を本営に連れていこうとした。

　すると近藤は、兵隊の解散をしなければならないので、それだけの時間が欲しいと言うので、ツダドンは出来るだけの事はしてやろうと、解散に必要な金はあるかと聞くと、近藤はこの申し出を喜んだが、それは兼ねて用意してあるので、と物柔らかに断った。

　その近藤の物腰や恰好は、ツダドンが感心するほど実に立派なものだったが、近藤はいったん仮本営に引き取り、やがて砲三門とミニエー銃二百挺などの兵器類を送ってきたものの、近藤は戻ってこなかったので、それに

よって近藤に騙された事を知った。

それで、ツダドンは十五人の兵を連れ、近藤の仮本営へ行き、すでに暗かったため、菊の紋章入りの提灯に火を入れ、土間に座って近藤を待っている間に茶が出たが、毒かも知れないので飲まずにいると、やがて近藤が、仙台平の袴に紋服という立派な姿で現れてきて、待たせた事を詫びたあと、京都以来の隊士二人に、形見の短刀とピストルを与えて、繰返し懇切な注意まで与えた。

それを土間で聞きながらツダドンは、いくさに負けるとはこんなものかと思い、近藤への同情と、薩人特有の感傷が一時にこみ上げてきて、涙が留めなく流れたのを、近藤はこの官軍将の涙を、しっかり見たという。

「ツダドン」こと「有馬藤太」は、近藤の処刑方法に、敵将への処し方としては反対したが、結局、罪人同様の打首になり、首は彼の活躍舞台だった京へ送られ、梟首された。

令和四年二月